

哲学カフェ 第五回

九月二日(土)二時

第五回 九月二日(土)二時から

会場：雑貨と喫茶「ムーレック」(裏面参照)

「心と身体」―気功の本質―

ゲストスピーカー 榎崎勝則さん



西洋の考え方では心と身体というものは切り離して考えることが当たり前のように思われています。人間を「考える葦」としたパスカルのように精神がもっとも人間にとって大切なものであるとの発想です。そして、その精神を入れる入れ物として身体があるとしています。

現代人はすっかり忘れていくかもしれませんが、東洋では心と身体は一体のものとする考え方があります。「病は気から」といわれることばにもその考えが伺われます。今回は、そうした「気」をテーマに心と身体を考えてみます。

ゲストスピーカーの榎崎さんからコメントを頂いています。お目通しください。

皆さんこんにちは。北白川おはよう気功の指導をしています榎崎勝則(ならざきかつのり)と申します。北白川おはよう気功は京都市教育委員会が提唱していた「子どもたちの早起き運動」の一環として九年前に北白川にできました。開始以来一貫して私が指導しています。さて、気功といっても様々ありますので、今日は気功の解説をしながら、私の指導している気功の紹介をしたいと思えます。

私自身は一浪の後一九七三年に京大の理学部に入學しました。ノーベル賞にあげられて物理をしたかったです。入學時のオリエンテーションで「君たちの中には天才はいません。ノーベル賞には関係ありませんから、適当に卒業してください。」と言われて落胆しました。理学部を五年で適当に卒業して、地元の福岡県に戻って4年ほど学習塾をした後、二八歳で再び京大の文学部言語学へ入学しました。言語学ではイエスキリストの喋ったアラム語を専門に勉強しました。

三七歳の時、全身脱力するという奇病に襲われて京大病院へ入院しましたが、如何なる検査でも異常が見つからず「気のせいでしょう。」と医師に言われましました。「気のせいか!」ということで気功を習うことにしました。毎朝三ヶ月教えてくれる気功の先生がいて樹林気功を習いました。三ヶ月経った頃、自分の体の気の流れ、他人の体の気の流れが感じられるようになりました。気功を使つての「治療」もできるようになりました。

さて、気功はヨーガの原型ともいえる大宇宙と一体になるハタ・ヨーガから生じます。ハタ・ヨーガの構成要素プラーナ(気)、ナーディー(脈管)、チャク

ラ(ナーディーの叢)の中のプラーナとナーディーを主に対象にします。気功は中医学の中で発展したのですが、「気功」という言葉は一九五七年に劉貴珍によって提唱されて定着しました。

気功には、自身の中の気をコントロールする中国では主流の内気功と、自身の内と外の気の交換をして治療したり、他人を動かしたりする外気功があります。日本では気功といえば外気功です。私自身は自分の気を練って健康になる内気功が好きですが、他人を元気にするための外気功もします。ただ、他人を動かしたりすることには興味はありませんし、できません。内気功の中には体を動かす動功と、体を動かさない静功があります。中国では動功の方が太極拳と同様に人気があります。

さて、現在私が不思議に思っていることがあります。気功を使うと空間が離れている人にも気を「送る」ことができるし、例えば一年前の体の気の流れを感じることもできるということです。つまり、気は時間と空間を超えらるということです。空間を超えるのは量子力学のひも理論で何とか説明できそうなのですが、時間を超えるという現象が分かりません。ベルクソンの時間の概念を使えばどうかという提案がなされていますが、現在の私には理解できないでいます。

次回は今期最終の哲学カフェです

第六回 一〇月二七日(土曜日)二時から

特別企画

あなたが作る「哲学カフェ」

第四回報告

テーマ「どうすればほかの人とわかりあえるのだろう?」に、なにやら分り合えるマニユアルがあるかのような



ニユアンスを多くの人が感じておられたようです。もちろん、発題者としてはマニユアルを探すような議論を展開していくつもりはありませんでした。むしろ、「分り合えない」ことから出発し「分り合えない」に耐えることから、対話が生まれるのではないかと期待していました。

案にたがわず、参加者のみなさんからは「安易に分り合う」ことを求めることが人々の思考を狭めていくことが指摘されました。

普通私たちは「ことば」によってわかり合おうとするのですが、そこには危うさがあるように思える。赤ちゃんがお母さんのマネをするのは言葉や理解を通じてではなく、身体の共感によるように思える。音楽や絵画などことばが介在しない表現の中に「分かる」ということがあるように思うとの意見もありました。また、自閉症児との「コミュニケーションを考える時」、「ことば」が通じるかどうかが一般的な判断基準になるけれども、実はそうではなく身体的な共感のあり方の特殊性から彼らの「コミュニケーションの方法を知ることが大切だ」と思うとの意見もありました。

確かに「ことば」によって分り合おうとする、その言葉を使った(使う)人の文脈を理解する必要がありますが、その文脈というのはこれまた人によっ

て様々なので結局、完全に「文脈を理解する」ことは不可能だということ。ところが、日本の社会(だけではないかもしれませんが)は学校や会社、共同体で分り合えることが重要なことだと思われがちです。そのためにそれぞれ文脈を無視した「ことば」を使うことを強要しがちです。つまり「同調圧力」の強い社会だと言えるところの意見もありました。

「同調圧力」をはねのけ自律的にものごとを考えていくことはとても大切なことです。でもそれはとても難しいことで具体的な方法もなかなか見つからないのですが、いくつかのヒントも出されました。一つは、学校教育で「対話を紡ぐ教育」の必要があるのではないか。特に若い人たちが「正解」を求めることに慣れている現状では大切ではないだろうか。二つには、この「哲学カフェ」のような小さな集まりにも可能性はある。一つの考えに収斂させようとしない議論(対話)のできる場が増えて行けば希望が生まれるかもしれない。というものでした。

これらの議論と関連して、ナチズムについての議論や戦前の日本の「戦意」についての議論もできました。現在の政治に対する不満や不安があることを示しているように思います。機会があれば「戦争と平和」や「国を守る」などについて議論してみたいと思えました。

【参加者のみなさんからの感想】

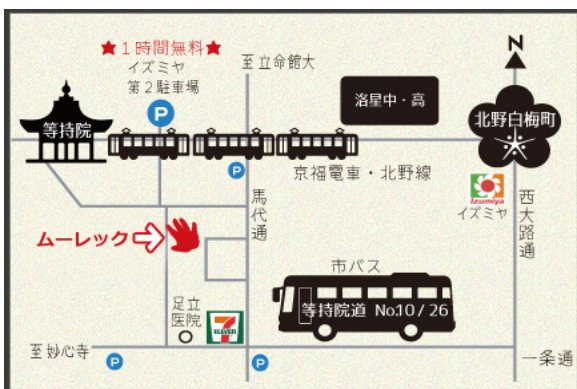
●若い頃は分り合いたい、かみ合いたいと思っことばの定義など考えていたが、今はやっぱり分り合えるということはある程度あきらめている。現在新しい知り合いができて、どのように分り合えるのか見てみたいと思っっている。

●「わかりあう」という言葉からはじまって分り分り話が出来ました。この一つの言葉の広がりこそさまざまな使い方を、対話をしながら理解するだけでも、世界や社会の見方がずいぶん深まるなあと思いました。とても楽しかったです。

●初めて参加させて頂きました。日常生活の中で「議論する」「対話する」といった経験はあまりないというか皆無ではないでしょうか。子どもたちから私たち大人までしっかり議論する経験を積むことが大切かなと思います。それには、どうやって…ですね。

●「わかり合うこと」ーむづかしい課題と思ったが、皆さんの話を聞いて、すべてまるごとわからなくても、わからないことから始めたらわかりあえることもあるのではないか、それでいいのではないかと思っした。今日は、わかりやすい話で少しわかり合えたかなと思っした。

●「わかりあうことは難しい」という事がわかりました。



- ＜交通のご案内＞
- JR京都駅から
 - 市バス(26)
 - 『等持院道』下車
 - 市バス(205)
 - 『北野白梅町』下車
 - 京阪三条駅から
 - 市バス ⑩
 - 『等持院道』下車
 - 市バス⑮
 - 『北野白梅町』下車